

はじめに

昭和十三年三月、志賀直哉が奈良を去って、「高島サロン」は彼の取り巻きによって「好日会」や戦後の「天平の会」へと断続した。平成二十一年五月の志賀旧居の復元・公開は、そんな交流の場として再生した趣がある。「公開講座」に集う方々や、機関誌「りずむ」の読者は実に多彩である。

会員として、志賀に師事した池田小菊の未発表原稿を紹介させて貰ったり講演をしながら、思えば、いろんな方々との出会いがあった。例えば『志賀直哉全集 第十四卷』（岩波書店 二〇〇〇年三月発行）の口絵に一葉紹介されている「昭和十三年三月十九日 直哉の東京転居の送別会を兼ねた遠足の記念」写真に関連して、同日の「日記」には「自分送別会 同勢四十九人、（中略）宇治黄檗山 寺の精進料理、うまし、」とあるが、万福寺で撮られた全体写真には五十人が写っている。実は増えている一名は、精進料理等を饗した万福寺の僧・四海達道師であることが、黄檗文化研究所副所長・田中智誠師のご指摘で解った。また、昭和十年頃、妻と三人の娘に「毎週一度」、「興福寺の多川さんに来て貰って、茶の稽古をさせる事にした。」（「茶について」とある「多川さん」が、興福寺貫首・多川俊映師の御尊父・多川乗俊師であることを俊映師に教えて頂いた。

そんなご縁で、志賀の「蘭齋没後」のモデル・加納鐵哉作の「売茶翁像」を万福寺で拝観したり、「興福寺文化講座」を拝聴したりと、ささやかながら見聞が広がっている。今後も、この会を通じてどのような方々のご縁があるか、大いに楽しみである。

白樺サロンの会

弦巻 克二